

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 6 号

2007年5月20日

発行人: 吉谷かおる

「我々は主を知ろう。
主を知ることを追い求めよう。
主は曙の光のように必ず現れ
降り注ぐ雨のように
大地を潤す春雨のように
我々を訪れてくださる。」 ホセア書6:3

石崎眞子 (東京教区)

私の大好きな聖書の一節です。

生来、能天気な私にも15年ほど前にと
ても辛い時期がありました。
この状況をどうにかしたくて朝に晩に
泣きとも言えるような祈りを神様に
ぶつけていました。
ちょうどそのような時、佐々木道人司祭
の聖書を読む会でこの一節に出合ったの
です。
なんて力強くそれでいて柔らかなやさし
い言葉なのだろう。
我々は主を知ろう。主を知ることを追
い求めよう。
私はずっとそうしてきた。今もそう
している。

けれどそれは自分にとって味方になっ
てくれる都合の良い神様を追い求めて
いただけなのではないか、と思った時
「そう、まだまだだね」という神様の
声が聞こえたような気がしました。
同時に本気で無心で主を知り追
い求めた結果が、私の望んでいるよ
うな事でも何か大丈夫かもという
不思議な確信も感じました。
それはそのあとに続く、主は曙の
光のように必ず現れという頼もしい
言葉が私に大丈夫だよとメッセ
ージを伝えてくれたのでした。

そして、大地を潤す春雨のようにと当時の私のカサカサになった心が柔らかく潤っていったのを今でも覚えています。今年の4月の東京はよく雨が降りました。まさに春雨です。じつは春雨は濡れるとかなり寒いです。15年前には乾いた心を潤してくださいと願い祈った主の雨ですが、今その雨に

濡れたら現在の私は身勝手なもので濡れた寒さに震えるかもしれません。でも私は思います。主の雨で濡れて寒く震えても、それでもまた私は主を知ることを目指し求めようと。そして神様のこんな声が聞こえることを思います。「なかなかやるね」と。

・・・兄弟たち、あなたがたにお願いします・・・

司祭 越山健蔵 (東北教区)

「兄弟たち、あなたがたにお願いします。...愛をもって平和に暮らしなさい。...気落ちしている者たちを励ましなさい。...全ての人に忍耐強く接しなさい。」

テサロニケ5：12-14

私が住んでいるいわき市小名浜は、日本でも有数の漁港と工場群が立ち並ぶコンビナートの港町です。そのせいか、出稼ぎの外国人の方々がたくさん住んでいます。一昔前の勢いはありませんが、それでも浜特有の明るさと活気が、みなぎっています。言われている好景気とは、まったく無関係にリストラされ、家を失い、家族と離散した60歳代の方々が、最近頻りに教会を訪ねてきます。訪ねてくるほとんどの人が、出稼ぎに来たが仕事がなく、故郷に帰る旅費を何とか都合してもらえないかと、懇願されます。あきらかにうそとわかるようなつらい人生を演技して酒代を求めている方もいます。

しかし此処のところ本当に困っているという事が伝わってくる方が増えていきます。教会ですから、どんな状況にあってもまずは牧師館にて軽食とお茶をさしあげながら、お話しを伺う事にしています。皆さんそれぞれに過ごしてきた人生を語ってくれます。奥さんのこと、子どものこと、両親のこと、お酒とギャンブルで失敗したこと、...共通しているのは、自分を責め昔の生活を取り戻したいが、もうあきらめてしまっていること、これからどうしていいかわかりませんと繰り返します。市役所でも住所不定ということで、簡単には助けてくれません。とりあえず、助けを求めて、教会の扉を叩きま

す。人としての尊厳を想いながらも見ず知らずの人に頭を下げることは、たいへんなことだと思っています。必死に旅費がだめなら、今日の晩飯 1,000 円でも、500 円でもと何度も何度も懇願されます。

昨日も初老のご夫妻(?) が訪ねてきました。聞けば、私と同じ団塊の世代です。土木工事で日銭の生活をしていましたが、体を壊して働けなくなった、家賃も払えず故郷に帰るといふ、連れは終始下をむいたまま、コーヒーには全く口もつけず、横に置いてある私の息子の写真

(遺影)をじっと見つめておいくつですかと聞かれました。私にも子どもがいますが、もう会えないのです、...と目が潤んできたのに気づき、つらい人生を背負っているのだなーと胸が痛くなりました。何処へ行くのかも告げず、何度も何度も頭を下げながら教会を後にしました。

帰ってから妻が言いました、靴屋のマルチンさんならどうしたのかなー...。たとえ騙されても人を信じることができる自分でありたいと願っています。

* * * 国連女性の地位委員会第 51 回会議、

聖公会女性会議に参加して * * *

司祭 木村夕子 (北海道教区)

国連・女性の地位委員会第 51 回会議に、東京教区の神崎直子さんと共に参加しました。「女兒に対するあらゆる形態の差別及び暴力の撤廃」というテーマで政府代表と NGO 団体で活動する多くの女性が集いました。日本に暮らす 10 代の女子が置かれている現状や抱えている問題に、実はあまり視線を向けていなかったという政府代表からの率直なコメントがありました。それだけに国連の議場、聖公会女性会議の場共に 10 代の女子が招かれ、彼女たち自身の声で健康と安全と教育が保証される社会を求めることが出来たことはとても重要な意味を持っていたのだと思います。日本の 10 代女子が必要とす

る健康・安全・教育の課題として、10 代に増加している性感染症、望まない妊娠、HIV/エイズ、出会い系サイトでの犯罪被害、援助交際、性暴力被害等があるのではないかと思います。これらの課題は全て女性と男性の間に発生する問題です。

日本は男女共同参画社会の実現に取り組んでいますが、男女の同権・平等は職場に限らず、家庭においても学校においても公共の場や路上においても実現される必要があります。女性自身が現実を学び女性を守ると同時に、男性と共に問題解決に向けて取り組むことも大切なのではないかと思っています。

第15回聖公会女性フォーラムのご案内

女性フォーラムは、聖公会有志の女性たちが、草の根での交流をめざして毎回自主的に企画・運営されてきたものです。15回目の今回は、沖縄の地で開催されることになり、現在沖縄教区の有志の皆さんで、準備を進めてくださっています。

「常夏の島沖縄で主にある姉妹が祈り、分かち合い(ゆんたく)をしましょう。お待ちしております」とのメッセージとともに沖縄の姉妹からご案内が届いていますのでご紹介します。締め切り間近ですが、ぜひご参加をご検討ください。

(なお、宿泊につきましては、各地からの宿泊付き航空券パックの方が割安となる場合が多いので各旅行社などでお尋ねいただければということです。)

第15回 聖公会女性フォーラム いちやりばちょ〜で〜(出会えば姉妹)

しかし、あなたがたは以前は遠く離れていたが、今やキリスト・イエスにおいてキリストの血によって近い者となったのです。エフェソの信徒への手紙2:13

主の平安がありますように

1992年から始められた「日本聖公会女性フォーラム」は今回で第15回になります。私たちが教会生活のなかで抱く願いや夢を分かち合い、そしてそれらを阻んでいるものに目を留め、新たな試みを探ることを重ねてきたと思います。祈りと聖書の学びはいつも私達の指針でした。

今回のテーマは「いちやりばちょ〜で〜(出会えば姉妹)」です。

南国沖縄で開催するにあたって、キリスト・イエスの名のもとに遠くから主にある姉妹が集い、祈り、分かち合い(ゆんたく)することで御たがいにより深く姉妹たちが理解し支えあうことができたらと思っています。



日時 2007年7月5日(木)～7日(土)

受付 14:30～

会場 諸聖徒教会 沖縄市園田2-36-12

宿泊 参加者各自でお願いします。

参加費 1万円(食費、諸費)

部分参加 3千円+食費実費

申し込み締め切り 5月末まで

申し込み・問い合わせ先

申し込みは、お名前、ご住所、電話番号、FAX番号、所属教会を書いて
下記へ送って下さい。

〒901-0241 沖縄県豊見城市字豊見城 977-1 小祿聖マタイ教会

電話・FAX 098-850-3831

担当 高良孝子 高嶺初子 (沖縄)

(主催 沖縄教区女性フォーラム準備会)

プログラム

7月5日(木)

14:30 受付 15:30 開会礼拝 18:00 夕食 19:00 いちゃりばちょ～で～
ふれあいタイム 20:30 コンプリン

7月6日(金)

9:30 朝の礼拝 10:15 セッション1・2 12:00 祈り・昼食 15:00 意
見交換フリータイム 18:00 夕食 お話 20:30 コンプリン

7月7日(土)

9:30 振り返り 10:30 閉会礼拝(聖餐式) 12:00 解散

*会場に近いホテル・・・宿泊先のご参考にどうぞ。

- ・ラグナガーデンホテル(宜野湾市 那覇空港より車で30分)
- ・コスタピスタ沖縄(北中城村 那覇空港より車で50分)
- ・東京第1ホテルOKINAWA GRAND MER RESORT(沖縄市 那覇空港より車で50分)
- ・ザ・ビーチタワー沖縄(北谷町 那覇空港より車で40分)

ジェンダープロジェクト・新メンバーが自己紹介
します!! どうぞよろしく

西原美香子 (中部教区) =====

中部教区の岡谷聖バルナバ教会の西原美香子と申します。私がジェンダープロジェクトに入ったきっかけは、昨年8月に開催された第1回聖公会女性会議。この会議に参加し、とても元気をいただいたことから、より広く、さまざまな教会の女性たちが繋がるお手伝いができばうれしく思い、プロジェクトに仲間入りしました。

女性たちが企画したこの会議は、礼拝やワークショップや裏方にいたるまで、実にみごとに一人ひとりの女性たちのタレントが活かされていました。それぞれが自然体で、決して肩肘張っていない方たち。「わぁ～！聖公会にはこんなにステキな人たちがいたんだぁ～」という感動をおぼえたことは、私にとってその夏一番の恵みでした。

私は、NCC 女性委員会のスタッフとして、これまでさまざまな教派の女性たちとの交わりの機会を得てきました。毎月1回、互いの教派の動きを分かち合ってきたのですが、今なお

古本みさ (京都教区) =====

初めまして。昨年夏に行われた女性会議に、この3月まで在籍しておりました神戸教区よりの派遣ということで出席させていただき、このプロジェクトの存在を知りました。そこで聖公会には何て素晴らしい女性がこんなにもいらっしゃるのだらう！と感動し、私にも日本聖公会のために何か出来ないだらうか、と考えて

男性的な論理がまかり通る教会の中で、女性たちが少しずつ道を開くことに、声を上げて喜び合い、ある時はそれに伴う痛みを分かち合って涙することもありました。女性たちって、おおらかで、しなやかでいて、したたかな強さもっています。荊の道も時にはジャンプして難なく乗り越えていくという運強さももち合わせています。運強さ?!いや、それは神さまのご計画の道によろしく気づいたということかもしれません。現在、女性たちをエンパワメントするYWCAというNGOで、若い世代に平和活動を継いでいくというミッションを得て働いています。ジェンダープロジェクトでも、私たち40代(内緒だった?)のメンバーが、次代への引き継ぐ道を描くという夢をもって働きたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。前号で西原美香子さんの所属が東京教区となっていました、正しくは中部教区です。お詫びして訂正いたします。

おりました矢先、新メンバーにとお声をかけて頂き、大変光栄に思っております。

私は15歳から約15年間米国で生活したのですが、アメリカでは今やジェンダー問題が社会で、ましてや教会で取り上げられることもないですから、数年前に帰国してひどい逆カルチャーショックを受けました。(徐々に慣れてきま

したが…(苦笑)

ジェンダープロジェクトでは、この海外での経験と語学力を生かして「海外窓口担当」をさせて頂くこととなります。今は、現在のジェンダー問題を考慮した上で、結婚時に自ら姓を変えてくれた理解ある夫と共に、彼の勤務先であ

る三重県菟野聖十字の家の職員住宅に暮らし、7月にはベビー誕生の予定です。しばらくはバタバタするかもしれませんが、少しでもお役に立てるように頑張りますので、ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いたします。

ジェンダープロジェクトからのお知らせ

昨年の「第1回日本聖公会女性会議」を経て、ジェンダープロジェクトは第1期の活動期に入りました。第1期ジェンダープロジェクトは「第1回女性会議」での呼びかけ文に掲げられた15項目のうち

日本聖公会全教区において女性の司祭職の正当性が保持され、男性の司祭職と同等に尊重されるよう働きかける

「女性の司祭の実現に伴うガイドライン」の改正に取り組む

聖書の中の女性の物語を掘り起こし、新しい声やメッセージに出会っていく

を重点目標にし、次期総会までの活動の柱にしていきたいと考えています。

また、京都教区での元牧師による性的虐待事件を重く受け止め、教会の中でのセクシュアル・ハラスメントを構造的な問題として捉え、防止に取り組むとともに被害をうけた方々の痛みをどのように教会の痛みとしてうけとめていくことができるのかを大きな課題として考えていきたいと思っています。女性会議に参加された方々、また参加されなくともジェンダーの課題に興味・関心をもっておられる方々と共にこれ

からも共に考え、分かち合い祈りあう関係をつくりあげていきたいと思ひます。

8月6日(月)～8日(水)には管区事務所においてジェンダープロジェクトの宿泊研修会を予定していますが、その中の一部を公開学習会の場とし、重点目標に関連した学びの場を設定したいと考えています。その折にはご案内をいたしますので、ぜひご参加ください。

第1期ジェンダープロジェクトの構成と役割分担は以下の通りです。どうぞよろしく。

大岡左代子(京都) 窓口・会計

高地敬主教(京都) チャプレン

西原美香子(中部) 研修

松原恵美子(大阪) 文書管理

古本みさ(京都) 海外窓口

吉谷かおる(神戸) 広報・ML管理

正義と平和委員会より

伊藤美佐子(京都)

松浦順子(東京)

協働 女性デスク

山野繁子司祭(東京)

木川田道子(京都)

♪ ♪ Book Review06

評者：吉谷かおる

『女王たちのセックス 愛を求め続けた女たち』エレノア・ハーマン著、高木玲訳 (KKベストセラーズ、2007年、2800円+税)

今年の春先はQueen(女王ないしは王妃)がブームでした。まずソフィア・コッポラ監督による映画『マリー・アントワネット』が公開され、まるでお菓子のよう、キュートで豪華な衣装が若い女性のあいだで評判になりました。「パンがないならお菓子を食えたら」という発言(実際には言わなかったらしい)でつとに有名なこのフランス王妃とは、子ども向け伝記『悲劇の王妃』を読んで以来のつきあいです。好きでもない人(ルイ16世)と結婚するつらさは、往時より心に刻み込まれています。『ベルサイユのばら』世代であれば、フェルゼン伯爵との悲恋にうっとりした人も多いのではないのでしょうか。夫との性生活がうまくいかず、そこへ子どもができないことを周囲に責め立てられる日々の苦渋は今ならよく理解できるけれど、「なぜこの人は暇な時間に読書をせず遊興にふけるのだろう」と、小学校2年生のとき感じた疑問が映画を見てよみがえってきました。のちに彼女の産んだ子の父親は誰? という謎以上に気になります…。



続いて公開されたのが、現在のイギリス女王、エリザベス2世の苦悩を描き高い評価を得た『クイーン』(スティーブン・フリアーズ監督)です。自称英国王室ウォッチャーの私、女王に

は勝手に親しみを抱いているうえ(宗旨が同じアングリカンですから)、女王に扮したヘレン・ミレン(大好き)がこの演技でアカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞とあっては、見逃すわけにはいきません。ダイアナ元皇太子妃の事故死の後、国民の非難を浴び窮地に追い込まれた女王は何を思い、どう決断したのか...という内容ですが、ヘレン・ミレンの抑えた演技が女王その人の抑制のきいた人格を思わせ、緊張感のあるすぐれた作品に仕上がっています。



この2本の映画を見て、手に取った本が今回ご紹介する『女王たちのセックス』です。タイトルは扇情的ですが、内容は歴史ノンフィクションで、不本意で愛のない結婚生活に苦しみ、それを埋め合わせるかのように寵臣に「愛を求め続けた」女王/王妃たちの人生を活写するものです。マリー・アントワネットはもちろん処女王エリザベス1世、エカテリーナ大帝など多くの女王・王妃が登場、大トリがダイアナ元皇太子妃となっています。主権者である女王はまだいいですが、年若くして異国から無理やり連れて来られた女王たちは本当に気の毒。仮に豪華な宮殿で多くの人にかしずかれ、どんな贅沢も思いのまま、だとしても、それがいかに非人間的で憂鬱な生活なのかは映画『マリー・アン

トワネット』を見ても明らかです。肉親からも故国の言語と文化からも切り離されて、夫からは顧みられず、自由に使えるお金があるわけでもなく、王宮に閉じ込められて隙間風や鼠、悪臭に悩まされながら、孤独と不幸に耐える...これが標準的なプリンセスの生活でした。国家の利害にかかわる「駒」として嫁がされ、王宮の「備品」となった彼女らの最大の使命は、言うまでもなく、世継ぎを産むことです。まさに産む機械(!)としての扱い。愛を求めずにいられますか！ 読書している場合ではない!!?

この中でかろうじて羨ましいかも、と思えたのはヴィクトリア女王だけでした。夫アルバート公の死後、馬丁だったジョン・ブラウンというハンサムで粗野で心の温かいスコットランド人が彼女に仕えた、というよりは彼女と十分に理解しあったのでした。



本書は『王たちのセックス』(2005)の続編ということなので、そちらのほうも読んでみました。ヨーロッパの宮廷で真の女王として君臨したのは、王の「公認の寵姫」である場合が多かった。これは単なる愛妾とは異なり、首相と同

様に正式な手続きを経て承認される公式な地位で、フランス革命以前のヨーロッパでは政治や外交に活躍することも珍しくはなかったそうです。ルイ 14 世の寵姫モンテスパン夫人、ルイ 15 世の寵姫ボンパドゥール夫人などがある名ですが、正室である王妃たちはこれら咲き誇る名花の陰にすっかり隠れ、寵姫を尊重することでしか夫の敬意を得られなかったとのこと。しかしこの鏡を合わせたような2冊を読み比べてみて、王妃と寵姫のどちらに気苦労が多かっただろうかと考えると、正直なところ私は寵姫のほうがより厳しいストレスにさらされていると感じました。処刑された者も多い、王妃の寵臣たちの末路よりはましですが、生まれで劣る寵姫たちは、自らの努力と才覚でその地位にのし上がり、その後は身を削るようにして王を癒し、サポートする務めに明け暮れたのです。これもまた疲れる「国家的使命」でした。

好きでもない人と無理やり結婚させられる不幸は国王、王子にとっても同じこと。「青い血」をもつ王家の人たちは、誰かを愛し愛される人生はそれだけで幸せなのだ、といつも痛いほど教えてくれます。



「タリタ・クム」について

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5:41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。(三木メイ)

“ハラスメント” を 考える (上)

～すべてのハラスメントを防止するために～

日本聖公会は今年の3月末 セクシュアル・ハラスメントをはじめとするすべてのハラスメントを防止するための機関と相談窓口の設置をすすめるための「防止モデル案」を各教区に提示しました。この機会に皆さまと一緒に“ハラスメント”について考えてみたいと思います。

(管区 女性デスク)

「なぜ防止モデル案が作られたのですか？」

京都教区の司祭が起こした性的虐待の事件において、事件がわかった当初から教区が被害者の立場に立たず、司祭擁護にまわり、裁判結審後も加害者が謝罪しないなど、被害者に今も大きな苦しみを負わせているという状況があります。この経過の中で教会が犯した間違いについて、京都教区は検証を進めつつ、同じような人権侵害が他教区においても二度と起こらないよう、防止に向けて「各教区にセクシュアル・ハラスメント防止機関ならびに相談窓口の設置を進めるためにモデル案を策定する」ことを昨年の聖公会総会で提案し、全会が一致で決議したことによります。私たち、女性デスクもモデル案の策定に関わることになりました。

「“すべてのハラスメント”になったのはなぜですか？」

モデル案をつくっていく過程で、セクシュアル・ハラスメントは、多様なハラスメントのひとつであり、多くの場合、パワー・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、モラル・ハラスメントとも絡んでいて切り離せないものだということが気がついたからです。

わたしたちの教会は、性的虐待（性暴力）はもちろん、生活のあらゆる場面で起こっていることも含めてすべての暴力、人権侵害に対してノーという態度を表明する必要があると考えます。

「そもそもハラスメントってどういうことを言うんですか？」

ハラスメント (harassment) は、「(絶えず) 困らせること」「(繰り返し) 悩ますこと」「攻撃する、急襲すること」などの意味があり、力関係を背景に相手の意に反する言動によって、心理的、身体的、性的に人権を侵害する行為を指します。特に加害者はそのつもりはまったくなかったと主張するケースが多く、被害者との意識の隔たりがハラスメントの解決を難しくしています。ハラスメントは力の差があればどこであっても起こりえます。教会もまた例外ではありません。

「どのようなハラスメントがありますか？」

・ **セクシュアル・ハラスメント**…相手の意に反した性的な言動によって相手や周囲の人に不快感や苦痛を与える人権侵害行為です。今年の4月から施行された改正男女雇用機会均等法では、企業で

の男性へのセクシュアル・ハラスメントも防止することが義務づけられています。しかし男性が「長」や上司、全体のまとめ役を務めることが多い男性中心社会では、セクシュアル・ハラスメントの被害者の多くは女性であり、被害を他人に知られることを恐れたり、相談することで不利な立場に追い込まれないかということに不安に思ったりすることで、一人で問題を抱え、被害が深刻化することも少なくありません。

- ・ **ジェンダー・ハラスメント**…「男らしさ」「女らしさ」という文化的、社会的に作られた性差によって性差別的な言動を行ったり、性別役割分担を助長したりする行為。ジェンダー・ハラスメントがセクシュアル・ハラスメントを起こしやすい環境をつくるとも言えます。

例 「女性はどうぞ結婚退職するんだから責任ある仕事はまかせられない。」

- ・ **パワー・ハラスメント**…集団の中での地位や立場、あるいは技術や専門知識を持つことなどの力関係の中で、その力を濫用(むやみに使うこと)して、相手の意欲を著しく悪化させる不適切な言動または待遇を指します。

例 「文句があるならやめろ。おまえの代わりはいくらでもいる。」

- ・ **モラル・ハラスメント**…精神的虐待あるいは嫌がらせのことです。その人の自尊心に関わることを嘲笑したり、傷つけたりすること。恩着せがましい態度や、えこひいき、はやしたて、いじめ、無視、仲間はずれなど。精神的、心理的虐待だけに、外から見えにくく、第三者にわかりにくいことが被害者をさらに追いつめることになりがちです。

「・・・でも、やっぱりノーと言わない本人も悪いのではありませんか？」

暴力やハラスメントは力の差のあるところに起こります。そこでは、支配する、支配されるという関係が生じており、相手に「ノー」と言えない状況があります。にもかかわらず、加害者にしてみればその認識が薄く、多くの場合、「相手はノーと言わなかったから。」という理由がいたり、また自分としては「親しさの表現」や「個人的な好意」「指導」「励まし」のつもりだった、ということになります。また周囲も、「被害者の側にも落ち度があったのではないのか。」「それぐらいがまんしなさい。」「日本では酒の席がコミュニケーション」などという態度であれば、被害を受けた人は、「“ものわかり”の悪いのは私の方なのだろうか。」「ノーと言えない自分が悪かったのではないか」と考えることになります。

起こったことが「被害」であるかどうかの判断は、基本的には、加害者がどう思うかではなく、言動を受けたその人がどう思うかが基準となります。被害者は、ノーを「言わない」のではなく「言えない」状況、立場にあることを理解する必要があります。

- * ハラスメント、あるいはハラスメント防止、ということに関して、ご質問やご意見を女性デスクにお寄せください。この防止案の提案が、不足や不備な点も含めて各教区でのハラスメント防止に向けての議論の始まりとなるよう願っています。なお、防止モデル案は、今のところ各教区事務所へ送られています。

女性デスク 木川田道子

ジェンダー一口メモ 「エンパワメント empowerment」とは???

たまには耳にするけれど、わかるようでわからない、そんなカタカナ用語について取り上げるこのコーナーも第6回となりました。今回は、「女性のエンパワメントの促進が課題である」というように用いられるエンパワメント(エンパワーメント)について考えたいと思います。「パワー」が入っているため、エンパワメントと聞いただけで力が湧くような気がするかもしれませんが(?)やはりわかりにくい言葉の一つなのではないでしょうか。エンパワメントは、1970年代半ばから国連や国際会議において「開発」をめぐる議論の中で提起されてきた概念で、ことに「北京行動綱領」を採択した1995年第4回世界女性会議以降、ジェンダーをめぐる課題の鍵となる概念として定着してきました。辞書を引くと、権限[能力]を与えること、能力をつける[高める]こと、といった意味が書かれているはずですが、AERA Mook『ジェンダーがわかる』(朝日新聞社、2002年)には「力を奪われた状態にある人々が、政治・経済・社会・家庭などのあらゆる分野で、自ら意思決定し、行動できる能力を身につけていくことを指す」とあり、どんな「力」が想定されているのか、より詳しくわかります。これで、よーし、わかった!となりそうですが、もう少し。

簡単な日本語に置き換えるために、「力をつけること」とされることが多いエンパワメントですが、CAP(子どもへの暴力防止プログラム)トレーナーの森田ゆりさんは、「エンパワメントを『力をつけること』と理解してしまったら、それはあの『自立』のエリート意識と少しも変わらなくなってしまふ」*とこれを批判し、人と人との関係のあり方としてとらえることを求めています。確かに、ガンバレ、ガンバレ自立しろ、とは言うのも言われるのもいやなもの。そうではなくて、互いにあるがままの姿をまず受容し、人が本来もっているパワーや個性(内在する資源)に働きかけあうこととしてエンパワメントを考えたい。そして権力、暴力、抑圧などの否定的な力をはねのけ、信頼、共感、権利意識などの肯定的な力を育てあっていけるように、と願います。*森田ゆり『エンパワメントと人権 こころの力のみなもとへ』解放出版社、1998年 (吉谷かおる)

ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせは、下記にお願いいたします。

大岡左代子 (和歌山聖救主教会) 073-422-0055 Fax 073-436-3333

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトは、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3~4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでいただけたら幸いです。よりよい紙面にしていくために、ご意見・ご感想をお待ちしています。これから梅雨どきになりますが、どうぞお元気でお過ごしください。この夏はぜひ、陽光あふれる沖縄でお会いしたいですね。(吉谷かおる)
